

< 海外情勢 >

米朝首脳会談の行方

「意外に高い北朝鮮核放棄の可能性」

藤井 巖 喜 〈国際政治学者〉

5月10日、トランプ米大統領は、Twitterで「6月12日にシンガポールで金正恩との首脳会談を行なう」と発表した。

史上初の米朝首脳会談の実現性が高くなってきた。日本の評論家やジャーナリストは「北朝鮮が核兵器を放棄するわけではない」と盛んに言い募っており、マスコミの論調も一般に北朝鮮の核放棄に関しては懐疑的である。しかし、このところに来て、北朝鮮の全面的な核開発放棄の可能性が高まってきた。

その可能性は世間一般に言われているよりも遥かに高いものと評価できる。

そもそもアメリカと北朝鮮の首脳会談が開かれれば、その後の選択肢は3つしかなくなる。

第1は、北朝鮮が短期に完全な核開発の放棄をするというシナリオである。トランプ政権の言い回しをそのままに言えば「**完全で検証可能で不可逆な非核化**」が必要になる。そのような非核化が完成した時にのみ、トランプ政権は北朝鮮への経済制裁を解除する。このシナリオ通りに進めば、その延長戦上に平和条約の締結があり、米朝間の正常な国交の樹立が期待されている。核兵器は放棄するが、北朝鮮の金王朝体制はサバイバルし、金正恩も生き延びることが出来る。

第2の選択肢は、米朝首脳会談の失敗を受けて、アメリカが北朝鮮を全面攻撃するというシナリオである。北朝鮮が完全で検証可能で不可逆な非核化を、しかも短期間に受け入れなければ、米朝交渉は完全に決裂する。トランプ大統領は例え米朝首脳会談が開かれても、北朝鮮側がこのような非核化を受け入れなければ、5分で席を立つかもしれないと警告を発している。

つまりアメリカとしては、北朝鮮非核化の短期間における、しかも完全な履行を北朝鮮に受け入れさせることが交渉の唯一の目的であり、この目的が達成されなければ米朝首脳会談は失敗であるという認識である。

そこから当然、軍事的オプションの行使ということが選択肢に浮上してくる。尚、米軍が北朝鮮攻撃を行なう場合、所謂「ブラッディ・ノーズ（鼻血）」作戦は有り得ないというのが筆者の認識である。ブラッディ・ノーズ作戦というのは、北朝鮮のミサイル発射場や核兵器製造工場などの少数の軍事的重要施設をアメリカがピンポイントで攻撃し、その軍事的能力の圧倒的優位さを北朝鮮に見せつけようというものである。しかし北朝鮮は既にアメリカの軍事的優越を認識しているが故に、米朝交渉開催を受け入れたのである。それ故に、今更、ブラッディ・ノーズ作戦をやる必要はアメリカとしてはないのである。

昨年、既に、グアム島を離陸した B1 爆撃機が北朝鮮の防空識別圏内に侵入していたが、この時、北朝鮮軍のレーダーは米軍機の侵入を察知することが出来なかった。これは金正恩の心胆を寒からしめるのに十分であった。

金正恩は勿論、米軍の斬首作戦のことも知っている。ブラッディ・ノーズ作戦は既に実施されたと見る事ができる。金正恩は自らの命が危険に晒されていることを自覚して、その窮地から逃れる為に、米朝首脳会談を受け入れたに違いないのだ。

そこで米軍の攻撃がもしあり得るとすれば、それは何らの警告なしの全面的な北朝鮮に対する攻撃以外にはありえない。核施設のみならず、全ての軍事目標が瞬時に、そして徹底的に破壊されることになるだろう。特に米軍としては、日本や韓国に北朝鮮のロケット弾やミサイルが飛来しないようにする為に、可能性のある軍事拠点は瞬時に徹底的に破壊することになるだろう。

米軍がいうところの「**衝撃と恐怖**」作戦である。

第3のオプションは、米朝首脳会談は不調に終わるが、アメリカは軍事行動を行わず、経済制裁に戻るというシナリオである。この場合、勿論、軍事的な威嚇も引き続き行われる。チャイナやロシアは陰で北朝鮮をサポートし続けるだろうが、北朝鮮の経済状況は次第に悪化している。

現在のところ、庶民の生活は困っていても、金王朝に属する支配体制の人々の生活が困窮している兆しはない。しかし庶民の生活は困窮し、更に軍人や軍事産業関係者の食料や生活物資さえ不足しがちになれば、当然、北朝鮮社会全体は不安定になる。独裁体制にはほころびが生じてくるし、アメリカ・サイドか

らすれば、これを揺さぶりやすいということにもなる。金正恩とすれば、アメリカの直接の軍事攻撃は避けられても時間が経つにつれ、ジリ貧に陥らざるを得ない。自らの命の保証も危うくなるし、金王朝のサバイバルも確実ではなくなってくる。

以上が、米朝首脳会談後に可能性のある3つのシナリオである。

アメリカ側はこのことを承知しているし、勿論、北朝鮮側もこういったシナリオは当然、想定しているであろう。北朝鮮とすれば、何とか米朝首脳会談を長引かせて、その間に南北朝鮮首脳会談を先行させ、南北統一への具体的な歩みを進めてしまう。アメリカに対しては、非核化は宣言するが、その具体的な方策をどうするかというところで粘って時間稼ぎをする。

その間に南北朝鮮の統一構想を具現化し、高麗連邦実現に向けて前進する。

事実上、韓国に経済制裁を解かせてしまい、経済的困窮から脱する。

高麗連邦構想では、南北の直接の統一は第2段階での長期目標とし、第1段階では北朝鮮と韓国の経済体制をそれぞれに維持したまま外交と国防政策のみは統一するという方針である。

これなら韓国民の多くも受け入れやすいので、元々親北朝鮮の文在寅大統領としては当然、前のめりに高麗連邦構想実現に向けて突っ走るであろう。4月27日の南北朝鮮首脳会談で、このことはありありと見て取れた。この南北首脳会談は完全に北朝鮮側のシナリオによって進められ、韓国の世論全体が北朝鮮によって懐柔される結果となってしまった。韓国の文政権はこのことに積極的に協力したのである。

南が北の罨にはまったのではない。南が北に積極的に協力したのである。

以前にも指摘したように、現在の朝鮮半島を巡る状況は、「南対北」ではなく、「南北朝鮮対日米同盟」という形になっている。

米朝と中朝のバランス

5月7日、8日に、チャイナの大連で中朝首脳会談があり、世界の人々を驚かせた。3月25日から28日、金正恩は訪中し、習近平と会談している。そして今回、5月7日から8日に金正恩は大連で習近平と協議している。

この中朝首脳会談をどうみるかが今後の情勢判断の一つの分かれ道になる。

日本のマスコミは特に、5月7日8日の中朝会談を「中朝が団結してアメリカの圧力に対抗する為」とか、「北朝鮮が後ろ盾のチャイナに支援を求めているも

の」等と解説している。5月10日の産経新聞のコラム、産経抄も「金正恩氏は早速、中国・大連市を訪れ、習近平国家主席と会談した。『窮鳥懐に入る』の諺通り、『後ろ盾』の懐に飛び込んだ」と解説している。

ところが筆者の見立ては全く異なる。

恐らく北朝鮮がアメリカの圧力に屈して、全面的な妥協に走ろうとした為、習近平が危機感を抱いて、これを引き留めようと金正恩を大連に招き寄せたのであろう。3月下旬の中朝首脳会談についていえば、それまで米朝首脳会談のプロセスで、完全に蚊帳の外に置かれていた習近平の顔を立てる為に、金正恩が訪中したものであろう。

確かに短期間に2度の中朝首脳会談が開かれたことは、両国の緊密さの象徴とも考えることは出来る。しかし同時に北朝鮮がチャイナの影響力から逃れようと、必死に努力してきたのも又、事実の一面である。平壤は北京の言いなりにならない為に、懸命の努力を続けてきたのだ。

それは初代の金日成以来の北朝鮮の国策の神髄である。

そう考えてみると、2回の中朝首脳会談の直後に、金正恩がポンペイオ米国務長官と2回会談していることにも注目すべきである。3月下旬の中朝首脳会談の直後、恐らく4月1日頃、ポンペイオ（当時CIA長官）は金正恩と会談している。これが4月17日から18日の日米首脳会談の折に報道され、世界を驚かせた。5月7日、8日の大連での中朝首脳会談の直後、5月9日には、平壤を再び訪問したポンペイオ米国務長官は、金正恩と会い、3人の米国人の解放に成功している。ポンペイオ米国務長官は解放された3人と共に、専用機でワシントン近郊のアンドゥルーズ空軍基地に10日未明に到着した。

トランプ大統領はこれを出迎え、大歓迎した。又、同じ10日、冒頭で述べたように、米朝首脳会談を6月12日に開催することを発表したのである。金正恩は習近平と会った直後に、訪朝したポンペイオ米国務長官と会っているのだ。

俗な言い方をすれば、アメリカはチャイナの方に惹かれそうになった北朝鮮をふたたびアメリカ側に引き戻したのだともいえる。

ポンペイオ米国務長官は、Twitter上で次のように述べている。

今回の訪朝は北朝鮮側の招待によるものであった。今回の訪朝を通じて、北朝鮮側に『非核化の達成までは経済制裁を解除しないことを明確に伝え、間違った期待を抱かせないように念を押した』 ポンペイオ氏は米朝首脳会談の最終目標は『完全かつ検証可能で不可逆な非核化であることを北朝鮮側に改めて強調した』という。

北朝鮮はそのことを承知で、3人の韓国系アメリカ人の解放を行ない、アメリカへの好意を具体的に示したのである。

米朝首脳会談に臨めば、金正恩としては究極的には核兵器の全面放棄か米軍の北朝鮮全面攻撃か、の二者択一になることは分かり切っている。しかしそれを承知で、米朝首脳会談を受け入れざるを得ないところにまで追い込まれたのだ。恐らく金正恩は、自らのサバイバルの為には、核兵器全面放棄もやむを得ないと考えているに違いない。金正恩は単に核兵器を放棄するのみならず、韓国における米軍の駐留を認めるところまで妥協しようとしていたに違いない。つまり、米軍を韓国から全面的に追い出すのではなく、寧ろ少数の米軍を韓国に駐留させることにより、自らの命の保証にしようという考えである。

筆者は、少し前まではトランプ大統領は、米軍の韓国からの撤退というカードを持って、対北朝鮮交渉の切り札とするものだと考えていた。北朝鮮としては核兵器をギブアップしても、米軍が朝鮮南部から撤退すれば、こんなに有難いことはない。そうすれば、チャイナにもロシアにも恩を売ることは出来る。しかしアメリカの圧倒的な威嚇に晒された金正恩は、少数の米軍の韓国駐留さえ認めようとしていたのではないか。

この情報を掴んだ習近平が、危機感を抱いて急遽、金正恩を大連に呼び寄せたというのが、5月7日8日の中朝首脳会談の本質だったのではないだろうか。

朝鮮半島の完全な非核化の為には、米軍が韓国から撤退することが望ましい。米軍は原則としてどの部隊に核兵器があり、どの部隊にないかという事を公表しないことになっている。米軍がいれば核兵器が存在する可能性がある。そこで常識的に考えれば朝鮮半島の完全な非核化の為には、米軍が韓国から撤退しなければならない。しかしごく少数の米軍の駐留であれば、それが核兵器を保有しないことはほぼ確実である。

例えば、THAAD ミサイルに伴って韓国に存在している X バンドレーダーというものがある。この X バンドレーダーは移動式でも 1,000 キロメートル先までも見渡すことが出来る。出力の大きい固定式のものであれば、4,000 キロメートル先まで探知することが可能である。これが韓国にあれば、チャイナのチベットやウイグル地区までアメリカはレーダー監視の目が届くことになる。北朝鮮としては、こういった恩をアメリカに売って、自らのサバイバルを確実にすることが出来るだろう。少数の米軍の存在が逆に、金正恩の命を保証することになるのだ。習近平は金正恩に、そこまでアメリカに妥協しないようにと要求したに違いない。

しかし、4月13日、シリアのアサド政権に向かい、2度目のミサイル攻撃と爆撃を行なったトランプ政権の行動は、確実に金正恩を追い詰めている。